

村の未来へ農業をつなぐ

一歩ずつ明るい村に戻していこう



守友 裕一先生

福島大学特任教授。30年前から村の地域づくりに関わる。平成25年からは「いたてまでいな復興計画推進委員会」の委員として第4版・第5版の策定に尽力。「飯舘村営農再開検討会議」では議長を務める。

村には地域づくりや農業の振興について皆で議論してきた実績があります。「やりたい」人が出てくれば、さらに制度も支援も出てくるのではないかと思います。その中には生きがいで農業をしたいという人もあるでしょう。「営農再開検討会議」では、生きがい農業も生業（なりわい）農業も農地保全も、全てが議論の対象になります。村民に分かりやすい提案ができるよう進めていきたいと思っています。皆でひと踏ん張りして、飯舘村を一歩一歩もとの明るく楽しい村に戻していきたいと思います。

飯舘村営農再開検討会議



10月7日、村役場本庁で初回の会議が開かれ、営農する村民と有識者、村振興公社・JA・相双農林事務所などの代表ら9人が委嘱を受けました。この会議では、村内での営農再開に向けた見通しや事業の検討などを行います。

この日はさまざまな角度から現状の確認と情報共有を行い、今後のスケジュールを話し合いました。委員の任期は平成29年3月末までで、会議は11月に開催する第2回から一般に公開されます。

使っているので、村でも除染後の農地の地力を元に戻せると考えています。

生活の心配はありますが、それらに負けない位の希望は見つけています。年齢が65歳になり、少し焦りはあるけれど。

それなりに作れば市場でそれなりに売れる。迷っている人やこれから始めたい人達と研修もしたい。「やっている人がいるから」と、次の人次の人が出てきたらいいなと思っています。

民がいてくれたからここまで頑張れた

（妻の）民は同志です。「どうする」って聞いて、そこで相づちを打ってもらえれば自信になつて前に進める。「変なんじゃない」と言われれば立ち止まって考え直せる。民がいなかったら、ここまで頑張れなかったかも知れませんが。主力を有機野菜から切り花に切り替えた時も、実は民がやりたいて試作したのがきっかけだったんですよ。



民さんから一言

農業は絶対に一人ではできないもの。これからもお父ちゃんと一緒にやっていくつもりです。震災前は必至で朝から晩までやっていました。年もとってきたので、余裕をもってやれたらいいですね。休みも週に1日はきちんと設けて。（日出夫さん）

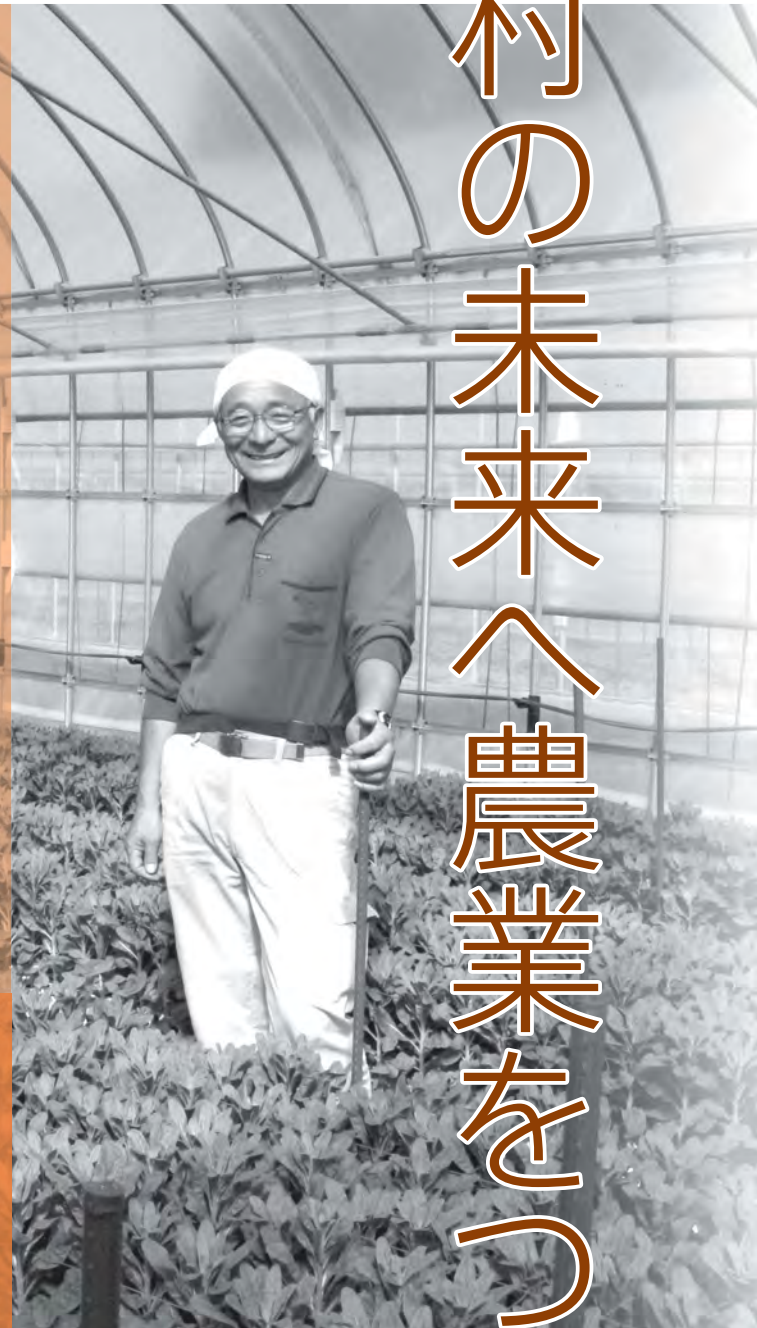
これまでのこと

以前は有機野菜が中心でしたが、研究グループが切り花と野菜に分かれ、その後20年間ほど切り花を作っていました。土作りをしていたおかげで、いい花を作ることができていました。震災後は平成24年に村が復興交付金事業で福島市内に整備したハウスを借りて花卉の栽培・出荷を再開。現在は露地野菜も一部出荷しています。



生まれ育った松塚でふたたびいい花を作ることに専念したい

関根・松塚
高橋 日出夫さん
民さん



いい切り花を作って早く村から出荷したい

村が復興交付金事業で福島市に整備したハウスでトルコギキョウを栽培し、今まで3回出荷しました。他にもストックなどを作っていて、露地で瑠璃玉アザミなども試作しながら、それらも出荷しています。

今出荷しているものは皆、市場に受け入れられ好評です。それでも私はやっぱり、生まれ育った松塚で花作りを再開したいと思っています。

松塚で新たにハウスを建てたら、どのハウスにどの切り花をとるイメージもできています。再開するのが楽しみです。早く村から出荷したい。災害前からお付き合いのある東和の人たちが作る有機農業用のたい肥を